E-2　名取市閖上地区　　2012 年 1 月 26 日（木）

報告者名　沼田　愛　　被調査者生年　1926 年（女）
調査者名　赤嶺　淳　　被調査者属性　名取市文化財保護審議会委員。もと小学校教員。
補助調査者　沼田　愛

地域の概要

閖上地区は、名取市北部の沿岸に位置し、東日本大震災以前は約 1,000 名が居住していた。行政区としての閖上地区は、町区と陸区（おかく）に分かれている。これは住所表示として、「閖上○丁目」となっているところが町区で、小塚原・大曲・高柳・牛野などは陸区に位置づけられる。町区のなかは、さらに町によって分けられている。

町区西側から上町、中町、下町となっており、中町から南に折れた湊神社周辺が新町である。ここが住所表記の閖上 1 丁目から 4 丁目に相当し、町区のなかでも古い地区である。

下町から宮下橋を渡ると中島丁である。中島丁には新町から海運橋を渡って行くこともできた。中島丁の南側には日和山がある。日和山より南側はデレンコと呼ばれる湿地帯であったが、現在は埋め立てられ、住所表記は閖上 5 丁目から 7 丁目となっている。

話者のライフヒストリー

話者は現在の閖上 2 丁目で、長女として生まれた。父親はトヨ丸の船主のもとで船頭をしていた。トヨ丸の船主は話者宅の向かい側に住んでいた。話者の上に兄がおり、彼は郵便局に勤めていた。話者の下には妹が 2 名いる。

話者は昭和 16 年に宮城県女子師範学校（昭和 18 年より宮城師範学校女子部となっている）に入学し、閖上を離れて宿舎で生活した。昭和 20 年頃の半年間は、群馬県館林の零式艦上戦闘機を製造する軍事工場に同級生とともに学徒動員された。米軍による空襲を受けた。群馬県で終戦を迎え、昭和 20 年 9 月から宮城に戻り、再び通学した。

昭和 21 年に卒業すると 4 月から閖上国民学校（その後、閖上町立閖上小学校に改称）に教員として務めた。本来教師は実家から離れた学校に勤務するが、当時は教員の給与だけでは生活ができなかったので、話者は実家から通えるように閖上小学校に赴任した。当時の話者の月給は 47 円であったが、男性教員の月給は 52 円だった。しかし、話者の給与は女性の先輩教員よりも高かった。

話者はその後、増田小学校などの小学校で教員を務めた後、再び閖上小学校に勤務し、57 歳で退職した。現在は婦人会の活動に参加し、名取市文化財保護審議会委員を務めている。震災前は閖上 7 丁目に居住し、夫との間に息子と娘がいた。夫は平成 18 年に亡くなっており、娘も津波により死去している。

郷土史研究会

閖上には郷土史研究会があり、現在も活動を続けている。郷土史研究会は以前、A 氏が主導したもので、彼は福島県の師範学校を卒業した後、日本大学史学科に進学し、そのあと教員を務めていた。閖上の小中学校では教員をしていない。『閖上風土記』（1977）を執筆した岡崎氏も郷土史に関心をもっていたひとであり、藤井氏とも懇意にしていた。

郷土史研究会は男性も多く参加し、閖上の旧蹟などを歩いてまわるなど活発な活動をしていた。平成 23 年 11 月 10 日にも、郷土史研究会主催で現地踏査会を開催した。話者は郷土史研究会に所属し、現地踏査会の案内も受け取ったが、参加していない。現在、話者には大橋氏が案内を届けてくれる。大橋氏は「名取ハマボウフウの会」の代表者も務めている。

シビ・カツオ漁と大漁祝い込み唄

閖上ではカレイ漁が盛んであった。塩釜、石巻、気仙沼などの港にも水揚げをした。カレイには夏期の産卵期が禁漁期間とされていため、夏になると「船を切り上げ」て漁を休み、船の掃除や修理を行った。

しかし大きな船を 2 艘持っている船主は、カレイの禁漁期間にシビ（マグロの若魚）やカツオを狙う漁に出る。彼らは朝早くでて巾着網をかけて漁をし、夜に港に帰ってくる。大漁だった場合にはウデコミ（唄込み）をしながら戻ってくる。このウデコミが現在の閖上大漁祝い込み唄である。

シビ・カツオを狙った漁には、運搬船と本船（親船）と呼ぶ大型船 2 艘と、シドブネと呼ばれる手漕ぎの小型船数艘で行く。大型船 2 艘で漁に出ることから、これを二艘曳きと言う。本船には綱梯子をつけた大きなカゴをぶら下げ、そこに登ったひとが海の色を見て魚群を探した。魚群が見つかると、デンボ（ダイボウ、船頭のことか ?）が声をかける。網をつけたシドブネが魚群を囲むように網をめぐらし、網の端を持ったシドブネが網を合わせると、網はキンチャク状になり、魚は出られなくなる。網の中にシドブネが入って魚を捕り、運搬船に乗せて港まで運ぶ。

シビやカツオが 800 本から 1,000 本捕れると大漁なので、ウデコミをする。これは名取川の河口付近にあった港に向かって船が入ってくるとき、シドブネに乗った漁師が板子（イタコ、船底の板のこと）を外し、それでフナドリ（船体の縁）を叩きながら「サーサー」と歌うことである。カバタ（川の端、川端）に船を迎えに出てきたひとたちは、歌うひとの声を聞いて、「○○の船が戻ってきた」と分かった。水揚げした魚は馬に乗せて名取駅に運んだ。

閖上には「○○丸」と名がつくような大きい船を持つ船主は何名かいたが、すべての船主がシビやカツオを捕れるわけではなかった。シビやカツオの漁は二艘曳きで捕るため、大きな船を 2 艘持っていなければならなかった。メヌケやタラも二艘曳きで捕った。二艘曳きの休息時間には、年配の漁師は編み物をし、若年の漁師は読書をした。話者も、船頭をしていた父にセーターを編んでもらった。

二艘曳きをする船主も、カレイの禁漁が明けるとまたカレイ漁に戻った。船の名前はトヨ丸、シンショウ丸というように、登録されている船の名前ではなく、その船を持つ者の名前の一部を当てて呼んでいた。

尋常小学校高等科 1、2 年生になると、男子も船に乗せられ、シビやカツオ漁の手伝いをした。その礼として、シビ一本などをもらって帰ってきた。話者の経験では、もらってきたシビなどは家でさばき、バケツに入れて井戸の水の中に吊しておいて保存した。翌朝になったらそのバケツを引き上げ、オバサンの家などに届けたりした。また、朝食にも刺身がでた。

漁が終わり、漁師たちが陸に上がると船主の家でオキアガリ（沖上がり）の宴会をする。これは船主が漁師たちに振る舞いをすることで、オキアガリのときにアタリメ（船主から漁師への賃金）をもらう。オキアガリのときにアタリメをもらうのはカレイ漁のときも同様である。

大漁祝い込み唄の替え歌は、オキアガリのときに盛んにつくられた。話者も漁師が歌っているのを聴いて歌を覚えた。踊りは女性が歌に合わせて自由に踊っていたもので、決まった振付はなかった。盆踊りなどで踊られていた記憶もない。

大漁唄込み（踊）・大漁祝い唄（踊）の由来

大漁唄込みの歌は、仙台の殿様（伊達家）との由縁のある歌である。朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に参戦した伊達家は、食糧難で苦戦していた。ちょうどそのころ大阪を目指していた太郎丸は、シケにあって朝鮮にたどり着いた。太郎丸に積んであった食料で伊達家の武士は助かった。太郎丸が閖上に戻る際に、歌の上手い船頭を乗せて帰ることになった。このときに船頭が歌った歌が大漁唄込みの歌である。伊達家が名取川でサケ漁の視察に来たときには、大漁唄込みの歌と踊りを見せた。これが、大漁唄込みの歌と踊りの由来である。

これに対して大漁祝い唄は、大漁の時に漁師が歌うものだが、閖上独自のものではなく、明治期に銚子から入ってきたものだといわれている。大漁祝い唄には、昭和 27 年ころ婦人会で踊りをつけ、全国大会にも出場した。振付を誰がしたのかはわからない。

閖上大漁唄込み踊

閖上大漁唄込み踊は、歌 4 名、掛け声複数名、踊り約 20 名、船を引っ張る役 2 名によって成る。伴奏に尺八をするひともいたが、ほとんど伴奏はつけない。船は長さ 1 間くらいの大きさである。演者はハッピを着る。

歌は 3 種類（大漁唄、大漁唄込み、大漁祝い唄）があり、歌に合わせて踊る。歌の順序をあらかじめ打ち合わせておくので、その順に踊る。歌や踊りの進行を歌がにぎっているわけではない。閖上大漁唄込み踊は、婦人会の新年会や地区民運動会で踊られる。踊りは簡単なので、婦人会や保存会のメンバーに限らずだれでも踊ることができる。保存会では民謡の先生をしていた大曲の丹野定夫さんが歌を歌っていたが、婦人会の会合などでは話者が歌った。

保存会では、「閖上大漁唄大会」や名取夏まつりにも参加する。「閖上大漁唄大会」は、民謡教室の受講生などが参加をして、閖上大漁唄をいかに上手く歌うかを競うもので、名取市文化会館で行われる。出場者は閖上大漁唄の一番の歌詞だけを歌って審査員に順位をつけられる。優勝者は、8 月にある名取夏まつりに出演する。

名取夏まつりでは、大漁旗でかざった船を 10 艘ほど閖上漁港から出し、名取川を上っていく。船は貝を捕る時に乗るような小型のものである。船に「閖上大漁唄大会」で優勝をしたひとが乗り込み、マイクで閖上大漁唄を歌う。陸のメインストリートで閖上大漁唄に合わせて踊りをする。

閖上大漁唄込み踊保存会の震災後の状況

保存会には震災以前、31 名が所属していた。陸区に居住するひとも何人かはいたが、ほとんどが町区の住民で行っていた。保存会では震災により 9 名が亡くなった。震災前に保存会会長を替えようという話になっていて、B 氏が就任するはずであったが、亡くなったため、話者が会長になった。

保存会では、今後の活動をどうしていくのか話し合えない状況にある。震災後住居地が離れてしまい、どこに居住しているのかわからない会員も多いからである。また会員と連絡が取れたとしても公民館のような集まれる場所もなく、また年配者が多いため交通手段がないという問題がある（とくに、婦人会の行事ということもあり、車を自由に使えないという事情もあるようである）。しかし、話者は今年（平成 24 年）の夏には再開したいと思っており、会員の所在を確かめようとしている。

閖上大漁唄込み踊に必要な道具類のなかでは、ハッピや手拭い、紐が買えればよい。船と櫂は大曲に居住している C 氏が保管していたため、津波の被害は免れている。

湊（みなと）神社の祭礼

湊神社は閖上（話者は町区のニュアンスで発言）を氏子圏とし、10 月に祭礼が行われていた。祭礼は宮司と氏子総代が取り仕切った。宮司は D 氏が務めていたが、その後は多賀神社の宮司の息子が兼務していた。誰が氏子総代をしていたのかは話者はわからない。

祭礼では名取市高舘の神楽（熊野堂神楽か？）を呼び、神楽殿で舞わせた。また、御輿が出て町区を回った。

御輿は厄年にあたる男性が担ぎ、中学生がハタ持ちをした。御輿を担ぐ男性は白い衣装を着た。獅子舞もでた。御輿は町区だけを回るが、それは陸区には「自分の神社」（八幡神社のことか？）があるからである。しかし、小塚原に老人ホームうらやすが出来てからは、そこに入居するひとたちに御輿を見せるために、うらやすには行っている。御輿はうらやすで休憩をとり、中島丁、日和山を回って神社に戻る。その後、公民館で直会をする。

祭礼にかかる費用は、町区の人々から寄付として集める。集金の役は氏子総代やその妻が行うが、総代に頼まれたひとが代わりに回ることもある。話者も代わりに集めて回ったことがある。町区の中でも古い地区（閖上 1 丁目から 4 丁目のことか？）のひとは、何のための寄付なのかわかるのですぐに集金に応じてくれる。しかし 7 丁目など新しくできた地区のひとは、何に使うための集金なのかと聞かれる。そのため、話者が集金に回るときは、新しい家は寄付を出してくれないから初めから回らないこともあった。

シジミ捕り

閖上地区内を貞山堀が縦断していたが、そこでの漁をすることはあまりなかった。シジミを捕ることはあったが、それは生業というよりも子どもの遊びを兼ねた食材の調達であった。話者は子どものころ、夏休みになると、竹製のカゴやバケツを持って貞山堀に行った。水浴びをして遊んでからシジミを捕り、小さいものは川に戻し、大きいものだけを持って帰った。土用シジミと

いい、シジミは夏に捕った。

話者の震災体験と震災後の状況

東日本大震災により、名取市で約 900 名の死者があり、その大半が閖上の住民であった。話者が他のひとから聞いた話では、地震のあと、家屋の損壊状況を確認するために家の外に出たひとが、名取側から水が引き、仙台市若林区六郷の方まで川底が見えたと言っていたひとがいた。津波の前に川の水も引いたということである。

しかし、上町や新町のひとたちは、津波が来ると思っていなかったし、それも知らされなかった。かつては地震のあと、漁師は海を見に来て津波の有無を調べたが、現在はそれをするひとがいなくなったので、津波が来ることもわからなかった。消防団が声をかけて歩いたと言うが、呼びかけている本人は一生懸命でも、聞く側はあっという間に通り過ぎられて何を言われたのか理解できなかった。

話者は息子が運転する車で避難していた。道路が渋滞していたので、横道にそれて移動したため渋滞にははまらなかった。車ごと津波で流され、物置に車が引っかかたのでその物置の 2 階に上り、助かることができた。

その後閖上中学校に避難し一夜を明かしたが、血圧が高くなり、翌日仙台市の JR 仙台病院に搬送された。その後避難所に戻ることができず、親戚の家に半月ほどいた。仮設住宅に入ることもできなかった。そのため、話者の妹が入居していたアパートに、空き部屋ができたら教えてほしいと妹に頼んでおいた。そのころちょうど妹の部屋の隣の部屋が空いた。その部屋はすでに不動産屋が次の借り手を得ていたが、妹が大家さんを通して頼み、話者は現在地で生活するようになった。現在は息子と住んでいる。

話者の家の墓は東場にあったが、東日本大震災の津波により墓石だけは残り遺骨はなくなった。話者の夫は平成 18 年に亡くなっているが、遺骨がなくなったので、代わりに免許証を遺骨の代わりとしている。この免許証は、話者の夫が生前乗っていた車の中に入れたままになっていたので、車を売ったひとから返却され、自宅で保管していた。その免許証が津波で流されて、小塚原にあったファミリーマートから見つかり、岩沼警察署に届けられたのである。

話者には娘がおり、他家に嫁ぎ、学校教員をしていた。震災当日は卒業式に出席したあと着物姿のままで話者を訪ねてきた。話者に会った後、兄が来てくれたから母親は大丈夫だと思い帰る途中で津波にあった。話者は、娘が着物姿だったので、遺体をすぐに娘だと確認できた。

昭和 8 年の三陸津波のときには、貞山堀を逆流し、中島丁まで津波が来たが、その後は町区にあがらなかった。津波の被害を記録した石碑が日和山にあるのは知っている。

閖上地区の寺

閖上には東禅寺と観音寺があり、それぞれに総代を務めるひとがいた。東禅寺は曹洞宗で、仙台市葛岡にある林松院の別院である。震災によって東禅寺の住職夫妻は亡くなった。本堂の一部は現存している。現在は林松院に仮本堂を置いているが、遺骨は名取市大曲の法徳寺に保管されている。話者は東禅寺の檀家である。

観音寺は真言宗で、南側に持法院という別院をもっている*。観音寺の檀家の遺骨は、名取市下増田の東光寺に保管されている。

墓場は東禅寺と観音寺の敷地内のほかに、トウバ（東場）と名取川付近にあった。東場と名取川付近の墓場は、宗教や宗派に関係なく墓が立っていた。東場は閖上７丁目にあった。

津波で流された墓石は、寺ごとに分けて集積されている。しかし、津波で流される過程で他の寺の境内地に混ざるなどし、必ずしも自分の旦那寺のところに集められているかどうかはわからない。

＊真言宗智山派の観音寺と持法院の関係については独立の別寺院であり、観音寺の住職が持法院を兼務していること、また、観音寺檀家の遺骨については仙台市太白区四郎丸の光西寺内仮納骨堂に保管されており、墓石は檀信徒の同意を得て現時点で閖上地区内の別の場所に集積されていることなどについて、伏見英俊氏よりご指摘いただいた。